

<目次>

韓流ブーム	1	秋史謫居址	5
韓国茶道史の中で	2	秋史・金正喜の「茶」	6
民族村博物館 「オールインハウス」	2 3	「茶」テーマパーク「オスーロク（哦雪緑）」	7
流刑の島・書聖 秋史・金正喜	4	ソギポの海	8

韓流ブーム

古くからの日本の読み習わしでは「済州島SAISHUU-TOU」というのが一般的だったが、今の若い人たちにとっては、「SAISHUU-TOU」では通じない。韓流ブームに乗ってなのだろうか「チェジュド」である。直行便ができて成田から2時間、帰りは1時間40分。釜山経由でしかいけなかった昔とは違って今では手軽に簡単に楽しめる島になった。晴れた日は対馬が釜山から見られるほど近いのに対して「チェジュ」は莞島からは見えない。佐渡島よりはやや大きい島、周囲は約250キロ、面積では香川県と大体同じである。



古代史の中でチェジュは「耽羅国」という名で登場してくる。7世紀になると大和朝廷は唐の国に盛んに使節を送る。このとき

「耽羅国」は大陸への海上ルートの側にあり、海が時化したときなど絶好の避難場所になった。漂流した一行が「耽羅国」で助かったことも記録に残っている。百済が滅んだ661年の遣唐使もここに漂流した。その際「耽羅国」は帰国する一行に耽羅国王子の一人「阿波伎」を同行させた、という記述が日本書紀に見られる。また669年にも「久麻伎」という王子が来朝したと日本書紀にある。やがて韓半島が新羅によって統一され、その勢力がチェジュ



まで及ぶと日本との蜜月関係は断絶する。ちなみにチェジュが「済州」の文字を当てられるようになるのは一時代後の高麗時代からだという。

今や世界的な韓流ブームでこの島を舞台にしたテレビドラマ・映画は頗る多い。「オールイン」「シュリ」「チャングムの誓い(大長今)」、中でも「チャングム」はひと

の「おしん」のような人気を獲得しているという。「チャンダム」の舞台の主な時代となっているのは朝鮮王朝11代中宗（1506～1544）の時代。朝鮮王朝歴代の帝王の中でも稀に見る暴君と言われる燕山君（ヨンサンゴン）の压制下で父母を失った幼女が、ふとしたところから中宗とそれを担いだグループの連絡役となり燕山君追放団蜂起の橋渡しをし、その時を契機にして宮中料理人の見習いとなって、宮中料理人の最高位・王の女医を目指していくという物語だ。

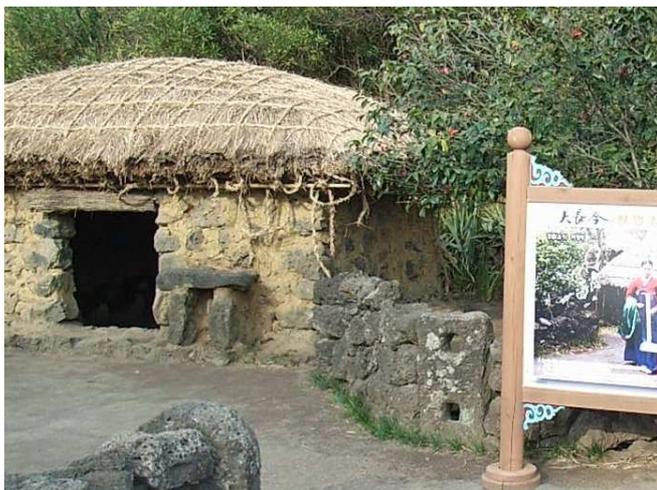
韓国茶道史の中で

ところでこの時代を日本の茶道史に重ねてみると、茶の湯の黎明期に登場する村田珠光（1423年-1502年）、武野 紹鷗(1502年- 1555年)の活躍した時代と一致する。記録上では、中宗、仁宗及び明宗の時代は朝鮮王朝の中でもきわめて多くの茶礼会が開かれている時代でもある。また、「朝鮮王朝実録」には、中宗が亡くなる年、中宗39年から茶を薬用にして他の薬剤と共に王に進らせられ風習が約300年続いたという記録がある。

私はこのドラマを見るととき当時の茶礼会はどんなモノだったのだろうか、どのように茶が扱われるのだろうかと毎回楽しみにしていた。しかし残念ながらそのような場面はなかった。その代わりきわめて美しい茶園の映像が見られた。この茶園はどこなのか、NHKに問い合わせてもわからずじまい。その頃、たまたま来日された韓日伝統文化交流協会の趙会長に伺ったところ、それはチェジュだという。一気にチェジュに行きたいという気持ちがつのったがなかなかその機会に恵まれなかった。ところが、昨年12月、ソウルで開催された国際茶文化セミナーに参加した折、通訳をしてくださった朴さんがチェジュにお住まいだと言う。居ても立ってもいられず、直ちに日程を繰り合わせて2月の第4週チェジュ空港に到着した。

チェジュはテレビの画面では南洋植物が大きく映って日本の海南諸島のようなイメージがあるが、降り立ってみるとそれほど暖かさは感じない。ただし、もの凄いの風である。チェジュは一年中どんよりしている日が多く快晴という日はほとんどないのだそうだが、そこはお天気男、空は青天である。ホテルで一息をついた後、朴さんの車で約1時間、島の北岸のチェジュ市から南東岸の民族村に向かう。

民族村博物館



民族村博物館は、もう人が住まなくなった昔のムラの住居を村ごと買い取り、この場所に移設して復元しているのだという。「山の村」「中山間の村」「漁村」に別れているがそれぞれ「チャンダム」の撮影場所となった建物が点在し何かにつかし

いような気がしてくる。建物や広場の前にはドラマ内の写真が立てられ、台詞が一言添えられている。

500年前の時代。ドラマという架空の世界。約100年くらい前のチェジュの暮らし。イ・ヨンエという女優と大長今という500年前の人物と想像の物語。そしてここで観ている自分。これらがこの民族博物館という空間の中で溶け合う。何とも不思議な時間だ。

「中山間の村」で屋根葺きの修理をしているところに出会った。約15cmくらいに束ねた茅（たぶん薄）をトラックで運び、屋根の下で一人が屋根に向かってスイスイと投げやり、屋根の上の職人がそれを葺いていく。屋根の高さは強風のせいだろう。低い。時折、向きを変えるために茅束を持って屋根の上に立つ職人の姿は青空の逆光に生えて何とも美しい。「この強い風の中どんな風にして茅を押さえるんだろう。スコットランドのように石を乗せるのかな」と思っていると、細い太さ1cmくらいの藁縄を格子に掛けて器用にとめる。一連の仕事の流れ、何とも気持ちのよい「動作」だった。

「オールインハウス」



チェジュ島の新しい観光名所、島の東端にある「オールインハウス」はソプチコジという地名の場所にある。この地は眼前に城山日出峰が広がり、そのむこうに牛島の一部が見渡せる。牛島は16世紀倭寇の根城となったところといわれるが、火山島のチェジュではめずらしい珊瑚礁がみられ、古からの景勝の地である。ソプチコジは「オールイン」で有名になる前から隠れた穴場だったらしく、ご子息をよく

連れてこられて遊んだという朴さんの話だと、昔は岬の端に続く小道も柵もなく海岸線はとても危険な場所、幼い子どもを連れて来るにはためられるような場所であったそうである。それでもソプチコジは最もチェジュらしいところで何もなかったころの昔のソプチコジはすばらしかったと彼女は何度も言葉を重ねた。私にとっては今でも充分美しい場所なのだが・・・たぶんそうなのだろう。「オールインハウス」ドラマのロケにつくった家は撮影後しばらく放置されていたが朽ちてきたため取り壊され、現在そこに立っているのは新たに観光用に再建された建物である。再建されたときに建物はかなり頑強になり、

マリア像の位置も変わっている。撮影された時の位置と再建されたときの位置



では写真で見ると相異はないようなのだがかなり印象は変わっている。ドラマでは、イナグサに「金貯めて家でも建てるかな、一部屋やるから一緒に住むか」とつぶやく時、二人が座っていた岩山はこの修道院（オールインハウス）を見下ろす場所にあるはずだが確認できない。特撮だったのか、あるいはあの岩はセットだったのだろうか。あたり一面に咲く菜の花は美しい。季節のせいなのだろうか、日本の種と異なるのだろうか、黄色の花のベルトは余り高く立ち上がらず、此岸の菜の花は彼岸の城山日出峰に美しい袴を着せている。日本の菜の花に比べてやや匂いが強いようだ。うわさ話なのだがこのあたり一帯はもともと軍の所有で最近三星財団が買収したと聞いた。これから先、ソブチコジはどんな風に関与されていくのだろうか。次に訪れたときに、菜の花はどんな顔を見せてくれるだろうか。

流刑の島・書聖 秋史・金正喜

チェジュには流刑の島というイメージがある。日本でも隠岐島、小笠原島、佐渡島、沖永良部島と、島は歴史の中で政治犯の流刑の地としてよく登場するが、チェジュに流された数多くの人物、その中でも秋史こと金正喜こそ、後世に最も影響を与えた人物である。



19世紀の韓国の茶道史の中で特筆すべきひとが3人いる。一人は実学の完成者で五百余巻を超える膨大な著述を残した、茶山丁若鏞（1762-1836）、二人目は茶聖草衣禪師、そして今一人は、書聖、秋史金正喜（1786-1856）である。

「百聞は一見に如かず」最近では「百見は一体験に如かず」だそうであるが秋史の芸術的偉大さは言葉で説明するのはほとんど無理である。私と秋史

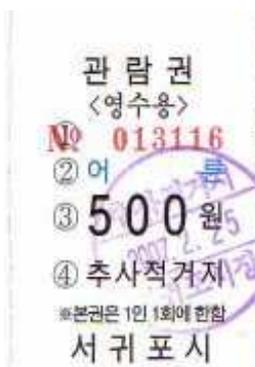
の書との出会い。それは10数年前、エバーランドにある三星財団・湖巖博物館で「山崇海深」の書を見たのが初めてであった。その後幾たびか秋史の書、秋史体の前に立つことがあったが、わたしはいつもただ呆然と見つめている。

秋史がチェジュに流されてきたのは1840年。ちょうど中国ではアヘン戦争が始まり、日本では前年の39年、蛮社の獄がおこって渡辺崋山などの開明家達が投獄された頃である。朝鮮社会のみならず東アジア全体で築かれていた性理学の世界観が崩れ社会の根幹までが動揺する。そんな時代だった。時の朝鮮政府は才気ある秋史をよほど怖がったのだろう「囹圄安置」という流罪の中でも最も過酷な刑を科している。朝鮮の流罪には「本郷」「私荘」「自願処」「州郡」「絶島」「囹圄」の安置の六通りがある。それぞれ自分の出身地、自分の屋敷、希望したところ、定められた地域（そのなかでは移動可能）、島流し、とある

が「圜籬」とは枸橘（カラタチ）のような棘のある樹木で家を囲い、その中に押し込めると言った流罪である。無論、家からは出られない。棘がある樹木で囲むから物理的に外に出られないというわけではなく、この場合の「圜籬」とは生きている存在を否定し、名誉を奪うといった象徴的な措置である。儒教思想の徹底した社会の中で秋史にとって住む家までこう烙印を押されるのは何よりも耐え難い苦痛だったに違いない。しかしこの状況下で、秋史は自らの書体、「秋史体」を完成していく。

秋史謫居址

流罪というのは権力が牢屋をつくって罪人をそこに押し込めるのではない。罪人が自ら



の家を造って（借りて）そこに閉じこもるのだ。秋史の指定された流刑地は「大静県」とされており、この村内で住居を定めなくてはならない。秋史はチェジュに九年間流されていたが二度転居、すなわち三所

に逼塞している（転居したのは飲み水に困ったといわれている）。このうち二度目に住んだ配所、姜道淳宅（この家に住んだのが最も長い期間だと言うのだが）が秋史謫居址として、今日、南済州郡政府によって復元されている。家屋は広さ六〇坪の敷地に五棟連なり、家の前に遺物の展示館が建てられ、向かって右隣が小さな公園である。罪人を象徴するカラタチの垣根は今は取り払われ、謫居址を記念して刻した石塔の向こうに景観を遮るモノ



は見あたらない。秋史が生涯、病的に愛した「茶」の木が、チェジュ島の茶礼愛好家（日本で言うと地方の家元のような存在）の手で敷地を分かつように新たに横一列に植えられている。毎年、秋史の生誕日には「茶礼」が行われているそうだ。

茶の木にずっと近づいてみる。日本の茶の葉よりはやや大きいその葉先には茶の葉特有の小さな棘が見られる。

秋史・金正喜は王室の姻族にあたる。18世紀から19世紀にかけて韓国王室は英祖（1724～1776）正祖（1776～1800）純祖（1800～1834）へと続いていくが、この間、政界は王室の外戚によるいわゆる勢道政治が繰り返され、権力の移動がめまぐるしい。秋史の大伯母は英祖の妃の貞純王后で、純祖が即位した当時は摂政を行うほどで、秋史の属する慶州金

氏はまさに権力の中枢にいた。しかし時がたつにつれ、権力は純祖王後の安東金氏に移り、やがて慶州金氏はその座から転げ落ちてしまう。さらに金正喜のような有能な者は、有能であるがゆえに、権力を脅かす者として、時の権力者から警戒され憎まれるといった構図になってくる。秋史の生涯は、名門慶州金氏の一族として生まれ、若干24歳で科挙の予科に合格、北京を訪問して学問の先端にふれ帰国、学芸の研鑽をして34歳で科挙文科の合格、多数の門下生を輩出して旋風を起こす。しかし安東金氏との政争に破れチェジュに流刑、9年間を経て赦免されるが再び北青に流刑、そしてようやく完全に赦免される、という人生である。

秋史・金正喜の「茶」

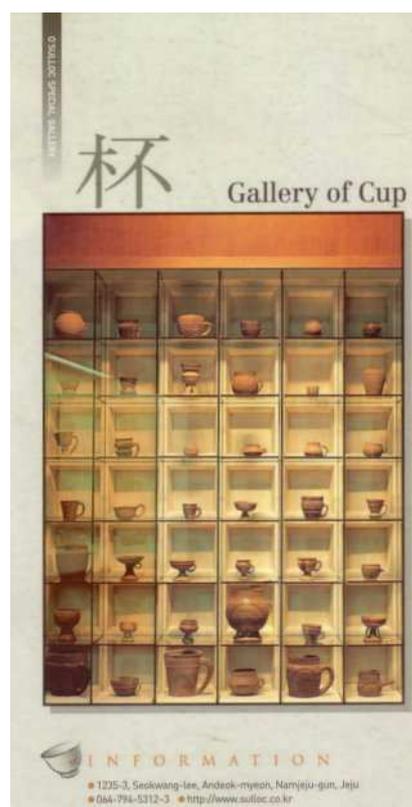
金正喜は生涯において200以上もの雅号を用いたと言われるが、書の世界では「秋史」、実学の世界では「阮堂」という雅号を主として使った。そして茶の世界では「勝雪」というのが一般的であった。秋史は1809年、25歳の折りに父の金魯敬に伴い燕京（北京）入りする。このとき交わった清国の二人の儒学者、翁方綱、阮元は生涯の師父となり、秋史の学問を支える権威にもなった。

阮堂という名は阮元から贈られた名である。当時、阮元は清朝文化を完成させ宣揚した功勞によって清朝社会において絶対的な権威者であったが、秋史はこの阮堂という雅号を、終生使用することとなる。大阪の中之島図書館が所蔵する「阮堂金公小伝」、「阮堂集」のように、日本ではこの名を冠した著作がよく知られている。

秋史が「茶」の世界で使用した「勝雪」という雅号もやはり阮元の影響下にある。秋史は燕京入りした際、この阮元から宋時代の銘茶といわれる「龍団勝雪」の馳走に預かる。そしてこれ以降秋史は「茶」の虜となってしまう。

阮元に馳走された「龍団勝雪」という茶は煎茶ではない。カテゴリーとしては団茶（固形茶）である。一寸二分四方の大きさの固形茶である。熊蕃が著した「宣和北苑貢茶録」によると「龍団勝雪」は宣和2年（1120）宋の北苑貢茶所で開発されたとある。精選した若葉を蒸し外皮を除いてその中心だけを固めたもので、押し型二枚で上下のをはさみ龍の模様を陰刻してある。茶の妙味は極上で、南宋の徽宗皇帝が著した「大觀茶論」で定めた白茶よりも素晴らしい、「雪よりも勝れている」ということでこう命名された。（高麗にも龍団勝雪という茶があったようだがこの関連については未詳である）

秋史が好んで飲んだといわれる茶とはどんなモノだっ



たのだろうか。茶聖といわれ秋史が生涯の友として親交した草衣にたいして秋史は盛んに「茶を送れ茶を送れ」と催促をしている手紙が見つまっている。また、草衣だけではなく茶が自生する智異山麓の寺院にも所望する手紙を送っている。こんなことから類推するに秋史が望んだ茶は単に採取された茶ではなく、なんらかの加工が施されたものではなかったかと思わせる。

高宗31年、草衣が秋史の弟、金命喜と琴湖で別れるとき詠んだ詩「琴湖留別山泉道人」には「閒碾鳳団焼鶏舌茶」という句が見られる。「鳳団」はおそらく「龍団勝雪」のごとき固形茶を表すのだろう。また、「鶏舌茶」とは高麗末期の、松広和尚の「雀舌茶」を思わせる。「雀舌茶」は茶の若葉を雀の舌に形容したものだが、そんな茶で創った研膏茶である。飲み方は小片を切り取り、茶碗に入れ、熱湯を入れて溶かして飲む。このように文献上から類推すると秋史・草衣の茶は今日の茶とはかなりかけ離れている。高麗時代の張源が「茶録」に清香とは、茶の葉をほどよく蒸したときに得られる香りであると言っているが、秋史は勝れた茶からは「海苔香が漂う」と解説している。秋史の茶は今の韓国茶よりも日本茶の嗜好にずっと接近してくる。

「茶」テーマパーク「オスーロク（哦雪緑）」

秋史謫居址（姜道淳宅）から西北に車で約10分ほどの所にオスーロク（哦雪緑）という茶のテーマパークがある。年と共に広がっていく茶畑の真ん中に茶文化の展示館を設け、茶の器・伝統茶室を創っている。飾られている高麗以降の茶器はそれほど珍しいものがあるわけではないが、新羅の頃の手付き茶碗（コップ）は面白い。また、日本では見かけられないが北欧のフレンドシップカップのような耳のついた茶碗も展示されている。カフェテリアでは日本と同じ抹茶アイスがよく売れている。オスーロク（哦雪緑）は韓国化粧品メーカーで有名な「太平洋」の経営で、同社は現在、韓国一の茶産業の担い手である。「太平洋」はオスーロクの他にもいくつかの茶園をチェジュに持っており、秋史謫居址から東に20分ほどのドンスーンという所にも茶園がある。ドンスーンは、太平洋が茶のビジネスに本腰を入れる際に茶の栽培に適する場所を



韓国中調査したとき最適だとされたところだそうである。樹木は静岡の藪北の亜流を思わせるが、この茶畑はさすがに綺麗だ。

茶樹の廻りには薄が生え、遠くにソギポの海が幽かに見える。茶の新芽を探り、断葉を撫でる。風がさわやかに吹いたところで、持参の茶器を取り出す。一行5人、茶

を喫して、遠き空を眺め秋史を思い、徐福を思い出す。

ソギポの海

今の韓国の若者は日常生活の中で漢字を知らないから。ソギポと言っても西帰浦とは結びつかない。一方これが日本だったらたぶん何かの当て字なのかな、と見過ごされてしまうかも知れない。ソギポは徐福（徐市）伝説から来る地名である。徐福がここから西に向かって帰った、というのだ。チェジュに伝わる徐福伝説や日本で伝わる徐福伝説の徐福（徐市）が、秦の始皇帝の時代に童男童女500人を含め総勢3000人の集団を引き連れ、仙人と不老不死の仙薬を求めて中国大陆から旅立った徐福と一致するのかどうかは不確かである。しかし紀元前219年秦の始皇帝「政」の名を受けて東方に旅だった斉（せい）の国琅邪（ろうや）出身の徐福というひとがいたことは司馬遷の『史記』の「秦始皇本紀」および「淮南衡山（わいなんこうざん）列伝」に取りあげられている。徐福の存在は長い間不確かだったが、1982年「中華人民共和国地名辞典」の編纂作業が行われる中で「徐阜（じょふ）村」（徐福村）が発見され、当地に残る言い伝えからほぼ実在の人物であろうと推測されるようになっている。

紀元前221年乱世を統一し都を「咸陽」に定め自ら「皇帝」と称した始皇帝「政」は会稽山に登り、天下統一の功績をたたえる碑を建立する。その後琅邪に三ヶ月滞在し、夏王朝以来の名門徐氏の長、徐福に「不老不死薬」に関する意見書を出させる。この文書をたてに始皇帝は「不老不死薬」をとってくるよう徐福に命じる。

史記の「秦始皇本紀」には、「徐市」（じょふつ）らは始皇帝の命を受けて海へ出たが神薬を手に入れることは出来なかった。「蓬萊へ行けば必ず神薬を手に入れることが出来ませぬ。しかし我々はいつも大鯨に遮られて島へ行くことが出来ませんでしたと偽って上奏した。」とある。

第一回目は何とか誤魔化したものの、紀元前210年、始皇帝は再び徐福に「仙薬」を求めて渡海せよとの命を発する。曖昧な答えでは始皇帝は一族を根絶やしにする。ここで徐福は意を決して一族3000人を引き連れ海を渡ることになる。徐福の「一族の結集をかけないと成就しない」という必至の応えに対し、史記の「淮南衡山（わいなんこうざん）列伝」は「・・・。始皇帝大いに喜び、良家の男女三千人を使わし、五穀の種と百工をたずさえて渡海させた。徐副は平原と沼のある島にたどり着き、そこにとどまって王となり、帰ってこなかった。人々は嘆き悲しんだ。」と記録している。始皇帝にとっては目障りな徐一族



を根絶やしにする口実がほしかったからなのだろう。それが自ら一族一党こぞって出ていってくれるならより好都合なのである。

さらに、今回新たに明るみに出た徐福村に伝わる伝承は驚くべき迫真性に富んでいる。

『まさに旅立とうとする時、徐福は親族を集めてこう言った。「私は皇帝の命によって薬探しに旅立つ。もし成功しなければ秦は必ず報復する。必ずや「徐」姓は断絶の憂き目にあう。われわれが旅だった後には、もう「徐」姓は名乗るな。」「それ以来、徐姓を名乗る者は全く絶えた。」』と

徐福伝説は日韓中の歴史を知る上できわめて面白い題材である。江戸時代、日韓の間では朝鮮通信使を往来させたが、この通信使と日本の儒者との会議で多くの時間が「徐福問題」に費やされたことは示唆に富むように思える。

ソギポの海から一行が本当はどちらに向かったのか、実際はわからない。また、西は方角を表すのではなくて「遠い」の意味だったのかも知れない。